

## 学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第17回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：11月24日（火）1日目

大学名：北京大学

氏名：馬洪林

初めて日本に来てまず印象深かったのは、JALスカイミュージアムの見学を終えて同社のスタッフとお別れをする場面であった。皆さんは私たちの乗ったバスが視界から消えるまで手を振り続けていた。バスの中では、ガイドの中島さんから私たちにも手を振るようお話があり、私たちは笑顔で手を振った。そして私たちは手を振るこの行為を楽しいものだと感じた。これは日本人にとっては日常的な礼儀の基本であり、それに比べて中国の「礼儀の国」の四文字は、さほど説得力を持っていないような気がした。

来日前、私は今回の活動をとても楽しみにしていた。面接の際、私は日本が私に与える最も大きな印象は「細」であると伝えた。「細」は二つの面についてであり、一つは「細部」、もう一つは「細やか」である。そしてJALスカイミュージアムの見学では「細部」について感じる事ができた。お別れの際の挨拶は礼儀における細部であり、その他技術的部分についてはとても精巧なものであった。そして私たちは非常に高価な実際の飛行機のエンジンファンブレードやタイヤに直接触れ、その質感や細部を間近に見ることができた。またその傍には詳細な紹介文があった。例えばタイヤはJALがタイヤメーカーからレンタルしており、一つのタイヤは約200回の離着陸の後タイヤメーカーに戻され、修復を経て再度使用されるとのことであった。

その後格納庫を見学したが、幸いなことに首相が乗る政府専用機も見かけた。格納庫内部の「安全第一」の四文字にはとても胸を打たれた。私たちはヘルメットを被り、間近で飛行機を見ながらスタッフの方の話に耳を傾け、また滑走路での飛行機の離着陸の様子を見学した。私たちは今回の見学を通じて、技術や運営そして管理に限らず航空業界について一定の理解を得ることができた。今日の最終目的地に到着するまでの間にこうした見学ができたことはとても有意義であり、リラックスした雰囲気の中で多くを学ぶことができた。

その夜、私たちはそれぞれの学校ごとにグループで大阪の街を散策した。初日ということもあり私たちは互いにまださほど打ち解けてはいないが、これから親しくなることで、私たち皆にとって楽しい旅となることを願っている。

最後に、大阪の夜景はとても美しかった。

日付：11月24日（火）1日目

大学名：北京理工大学

氏名：趙雨涵

今日は私にとって特別な一日となった。私はついに長い間憧れながらも複雑な感情も併せ持つ国である日本にやってきた。スケジュールの大半は飛行機での移動であり、マイナス10数℃からいきなりプラス21℃への変化となり、まさに中国的思考から日本的思考への転換と同じように馴染むのが大変であった。私は、とあることにとても後悔している。と言うのも、私は自分の着替えのために皆のスケジュールを乱してしまったのである。初日からこうしたミスをしたことをとても恥ずかしく思い、これは私の中国的思考により起きたミスだと反省をした（中国的思考が悪いということではなく、中日の思考や習慣が重なる点が異なっているということである。どちらが良い悪いではなく、互いに参考にすべきものだと思う）。だからこそ私たちは日本と向き合う際、新たな考え方やルールで対処し、従来の思考パターンを跳び越え、異なる視点から日本の魅力を理解しなければならない。これは私が今回日本で見学するにあたっての基本的なスタンスである。

今日はJALスカイミュージアムそして格納庫を見学した。そこはとても広く、飛行機が3,4機収容可能である。そこではスタッフはてきぱきと飛行機の点検を行っていた。格納庫全体としては中国国内にもありそうなものであったが、唯一違うと思ったのは、私たちが格納庫に足を踏み入れて間もなくして始まったラジオ体操である。数人のスタッフがやっていた作業を中断し身体を動かす様子を見て私は、いつになったら中国の作業場でもこうした光景が見られるのだろうかと考えた。これには二つの要素が必要であり、一つは企業がスタッフの健康や安全を重視することで、もう一つはスタッフ自身も自分の身を守る意識を持つことである。この二つが結びついて初めて人へのやさしさが形成されるのである。この実現において、私たちにまだ長い道程が待っていると思う。

それから感動したのは夕食とホテルであった。今回私たちを支援してくれた大企業に比べ、私たちはあまりにも小さな存在だが、それでも私たちは今回素晴らしい待遇を受けている。私は自分たちの能力を過小評価しているわけではなく、私たちはこうした大企業のように感謝の心で社会に対して恩返しをしなければならない、ということを言いたいのである。これら企業は成長を遂げた後、中日両国の平和的交流促進のため中国人学生を支援している。こうした企業の心意気には敬服させられた。そして、私たちは自分の学校の代表としてだけでなく、中国を代表する存在として未来の中日関係の先行きに関わっているのである。私は自分たちが担う重い責任を改めて感じさせられた。

**日 付： 11月24日（火） 1日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 潘向茹**

飛行機に乗るため早起きをして、私は初めて午前4時の北京の様子を目にした。視界を通り過ぎる道路の両側の明かりと共に、これまでにない新たな一日が夜の景色の中から始まった。

私は今回初めて日本に来た。沢山の目新しい体験は言うまでもなかったが、最も印象深かったのは、道中での日本のサービススタッフの笑顔であった。チェックインから安全検査、搭乗、飛行機内での朝食まで、サービスの種類や場所そして体験は変われども、日本のサービススタッフの親身な接客対応や笑顔は変わらなかった。これは私の今回の旅に多くの温かみと心地良さをもたらしてくれた。

午後はJALスカイミュージアムを見学したが、航空産業見学は初体験であった。文系の私はこの業界には詳しくなかったが、見学やスタッフのわかりやすい解説のおかげで、とても印象深い見学となった。私が感心したのは、まず格納庫内の標語である。中国の作業現場では様々な標語を目にするが、ここでは「安全第一」と「整理整頓」のたった二つであった。一つはスタッフに対する責任、もう一つは顧客に対する責任を表しており、短い非常に明確である。或いはこれこそが日本人の言葉より行動という真摯な仕事への態度の表れなのかもしれない。次に感心したのは、日本が環境保全とエネルギー再利用に非常に気を使っていることで、この点は日本での生活におけるごみの分類処理だけに限らず、JALの業務においても非常によく表れている。例えば、飛行機のタイヤは数百回の飛行で摩耗するが、破棄することはせず、リトレッドにより資源の節約と安全性の確保を両立している。私は中国国内の航空業界ではどうなっているのかは知らないが、社会責任と企業自身の利益を融合させる点は大いに学ぶべきものであるというのは、疑いの余地がないものだと思う。

JALでの見学では多くの体験ができ、様々な知識を得ることができた。JALの優れた技術や理念、そして優秀なスタッフなど、私は今回の見学で様々なことを考えさせられた。中国は現在では多くの優秀な企業や技術が登場し、工業においても従来からは大きな進歩を遂げている。しかし私はまだ成長の余地があると思う。いかに社会利益と企業利益を結び付けていくか、この点は今後中国企業が向き合っていく大きな課題であり、日本企業の経験に学ぶことが大切になるかもしれない。

**日 付： 11月24日（火） 1日目**

**大学名： 中央音楽学院**

**氏 名： 韓天雅**

東京へ向かう便は午前8時25分に出発するため、訪日団の全メンバーは朝の6時20分に集合し搭乗手続きを終えた。近いようで遠い国であった日本という隣国に、私たちは今回初めて向かった。

上空から日本の国土を眺めると、すでに日本の空気の綺麗さが感じられた。森林や田畑、家屋の形をはっきりと見ることができ、荒れ果てた荒土などは見かけず、一面の緑であった。羽田空港に着陸すると、その感覚がより強くなった。深呼吸をしたときのあの清々しさは忘れられない。また滑走路や道路では落ち葉やごみの一つも見かけず、すべてが私の想像していた通りであった。無限の期待や憧れとともに、私はこの土地に降り立った。今回の訪日活動で私は日本をさらに知りたいと思う。

今日私たちはJALスカイミュージアムを見学した。私は間近で飛行機が見られるということで、好奇心一杯で見学に臨んだ。まず私たちは展示エリアを見学した。ここには飛行機の各パーツの写真や実物、さらには各年代の客室乗務員の制服が展示されていた。また様々な業務の模擬体験や制服を着用しての記念撮影など皆はとても楽しい時間を過ごした。展示エリアの後方ではJALの今日までの発展の歩みが紹介されていて、飛行機の性能も次第に上がり、各設備も次第に整備されてきたといった過程を知ることができた。

その後私たちは格納庫を訪れ、スタッフが飛行機を整備している様子を直に目にした。そこではすべてが厳密であり、また整然としていた。日本人の仕事への細やかさや真摯さ、そしてルールを厳守するといった点はとても敬服すべきものである。またそこではスタッフからボーイング機の型番の見分け方についての紹介があった。さらに幸いにも安倍首相も乗る政府専用機を見かけた。またそこでは「安全第一・整理整頓」といった標語も印象深いものがあった。

JALスカイミュージアムの見学が終わり、私たちは飛行機で大阪に向かった。大阪に到着後は夕食をとり、宿泊先のホテルへ向かった。すべてが順調であった。

これから先の七日間の交流や見学を楽しみにしている。きっと様々なことを感じるであろう。

おやすみなさい、日本。また明日！

**日 付： 11月24日（火） 1日目**

**大学名： 中央财经大学**

**氏 名： 粟鳴飛**

今日は訪日活動の初日で、私たちは北京を出発し東京に到着後、JALスカイミュージアムを見学した。そしてここでの見学は常に驚きに満ちたものであった。

私たちはまず飛行機のcockpitやエンジンなどの見学をした。それらの隣には図や文字紹介があったのだが、私にとっては知らない単語が多かった。これには、日頃の地道な勉強や知識の蓄積が大事であると改めて思い知らされた。見学途中には見学者の記念用にスタンプコーナーもあった。スタンプは全部で5つあり、それぞれ専用の紙の上に押す。見学者はたとえ見学途中で多少疲れを感じても、この記念スタンプで疲れを和らげ、さらに見学への興味をかき立てることができる。これらのスタンプには日本人の細やかさと気配りが表れていた。

次いで私たちは格納庫を訪れた。中は大きく、様々な設備が置かれていた。またスタッフ用のロッカーや救急用医療設備などもあったが、全体的に非常に整然としていた。こうすることで美観の他、最大限に空間や時間を有効利用できる。例えば、突発事件があってもすぐに避難ができたり、或いは最寄りの医療設備で救助を行ったりできる。整然さは美観だけでなく、これほど重要な役割につながるものだとは知らなかった。

そしてここでの見学において、私はいくつかの大きな時計が設置されていることに気が付いた。数は多くないが、とても大きく、目立つ場所にあった。これこそ日本人の時間意識であり、いつでもどこでも強く時間を意識しているのである。

感想が多すぎて言い尽くせない。今日の活動は非常に有意義であった。明日以降の活動もさらに有意義なものに

なると信じている。

**日 付：11月25日（水）2日目**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：楊金鳳**

今日は嵐山の周恩来記念碑を見学後、金閣寺に向かった。金閣寺は室町幕府第三代将軍足利義満が造営した「山荘北山殿」が始まりとされている。金閣は三層構造で、二層目と三層目には漆に金箔が押されている。屋根は「柿葺（こけら葺き）」が採用され、2-3ミリの板を重ねて作られており、最上部には鳳凰が飾られている。また一層目は寝殿造り、二層目は武家造り、三層目は中国風の禅宗仏殿造りとそれぞれ異なる建築様式が採用され、室町時代の代表的建築物と言えるものである。日差しの下、金色に輝く金閣はとても美しかった。

午後私たちはオムロン京都太陽株式会社を訪れた。ここでは多くの感動があった。その理由はFA、家電通信部品、自動車部品、社会システム設備、健康医療機器などの業務範囲の幅広さだけでなく、このスタッフはそのほとんどが障がい者であったことにある。彼ら障がい者の一部は身体上の障がい（作業場で見かけた車いすに座りながら真剣に作業をしていたスタッフ）で、その他は精神や知力上の障がいである。また同社では障がい者へ仕事を提供しているだけでなく、彼らの職業技術訓練を行う他、医療スタッフを常勤させ健康管理も行っているとのことである。こうした企業のあり方は、障がい者は在宅で介護を受け、社会に出て仕事をするのができないという古い考えを打ち破るもので、障がい者を訓練し、彼らが仕事をしやすい環境をつくり、彼らの労働により彼ら自身の生活を多彩なものにすることで、より良い社会の実現につながるものである。私はこうした理念は中国が学ぶべきものだと思う。中国は人口が多く障がい者数も比較的多いため、もし彼らが前向きに生活することで社会に貢献することができれば素晴らしいことである。まさに「No Charity, but a Chance」というスローガンのように、障がい者への仕事の提供は慈善事業ではなく、より良い明日を創るためのチャンスなのである。

**日 付：11月25日（水）2日目**

**大学名：北京師範大学**

**氏 名：朴美陽**

午前の見学では金閣寺と嵐山の美しい風景を鑑賞し、中国のものとは異なる日本独特の名勝地を体験した。そして午後はオムロン京都太陽株式会社を見学したが、今日の活動の中で最も印象深くまた強い衝撃を受けたのは同社での見学であった。

オムロン京都太陽のスタッフは、その約8割が障がい者である。障がい者の採用率のあまりの高さに、私の考えは思わず会社の採算問題に及んだ。しかし、見学を通じ私の心配は無用のものだとわかった。「No Charity, but a Chance」のスローガンの下、太陽の家による生活や健康指導、そしてオムロンによる技術訓練を通じ、同社は2年目には黒字を実現したのである。

この他、私が最も感動したのは宣伝ビデオの1シーンである。納税証明を受け取った障がいを持つスタッフが嬉しそうに「自分も国に納税ができた、自分も役に立つ人間なのだ」と言いながら、その証明書を貼り付けたのである。私は、一般の人は日頃納税を喜ぶことはなく、逆にいかに節税するかを懸命に考えていると思う。私たちは確かに障がいを持つ人に同情や思いやりの気持ちを持ったりするが、私たちが解っていないのは、彼らが必要としているのは思いやりだけではなく、それ以上に対等に向き合ってもらいたいことなのである。今回の見学で私はこの点を学んだ。

最後に、同社の見学において私たちが最も学ぶべきだと思うのは、細やかさと細部へのこだわりである。例えば、知力に障がいを持つスタッフが通路を覚えやすいように、通路毎にそれぞれ色分けをする、そして左腕または右腕に障がいを持つスタッフをそれぞれ分業させ作業効率を高める、さらにパズル形式によりファイルの分類を行ったり、作

業台の高さを脚に障がいを持つスタッフが作業をしやすいように設計したりする等々、枚挙にいとまがなかった。

**日 付： 11月25日（水） 2日目**

**大学名： 北京理工大学**

**氏 名： 蔡子孺**

今日は朝早くから趙先生と大阪城公園を散策した。公園の空気はとてもさわやかで、多くの人が身体を動かしていた。その後私たちは嵐山を訪れた。そこは紅葉が彩りを添え、とても美しい風景であった。そして周恩来総理の記念詩碑『雨中嵐山』を訪れ、私たちはそこで周総理の当時の思いを朗唱した。その後私たちは金閣寺へ向かい、日本の寺院文化や地元の軽食などを体験した。

豪勢な昼食の後、私たちはオムロン京都太陽株式会社を訪れた。ここは太陽の家とオムロンが共同で設立した、障がい者へ仕事の間を提供する会社で、会社全体では約8割前後が何らかの障がいを持つスタッフである。また同社には「No Charity, but a Chance」というスローガンがある。ここで働くスタッフはいずれも様々な技能訓練と知識教育を通じて自立能力を磨いている。また同社ではスタッフそれぞれの状況に合わせた能力開発を行い、生産ラインを合理化している。例えば知的障がいを持つスタッフに対しては、部品毎に異なる色のランプで表示することで、複数の部品を順番通りに組み立てるといった作業を指導している。同社の見学中、私は感動しきりであった。スタッフそれぞれがひたむきに自分の仕事に打ち込んでいる。社会がその機会を与えれば、彼らはそれを活かし、社会に対して貢献をすることができるのである。そしてこうした公益性を持つ企業の存在は、優秀な企業は自身の発展のみを考えるのではなく、より社会的責任を持つべきであるということを示している。こうした理念は中国の多くの企業が学ぶべきものだと思う。

**日 付： 11月25日（水） 2日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 劉南星**

嵐山、渡月橋、金閣寺、日本語学習者にとって教科書の中で見る挿絵や、また風景はがきのようなこれらの景色が自分の目の前に現れた時の感覚は、私が中学生の頃初めて北京を訪れ、天安門の駅から出て青空の下に映える天安門を目にした時と同じものがあつた。

自然や文化的景観の見学はもちろん有意義なものであるが、より多くの収穫が得られたのは午後のオムロン京都太陽株式会社での見学であったかもしれない。オムロンは電子部品や体温計など多くの電子製品で名を馳せる企業であるが、そこに「太陽」の二文字が付いているのは、ここは障がい者に仕事の間を提供する会社だからである。この言葉そのものは一見ありふれているが、実のところ根本的な矛盾を内包している。

会社とは必然的に営利を求めるものであるが、同社では障がい者が生計を立て、さらには自立した生活を送れる場を提供するというのは、必然的に一定の公益性を有している。しかし同社の素晴らしいところは、営利と公益をうまく融合しているところである。見学時に目にした調節または分離可能な作業台、地面に色分けされて付けられた通路標識など様々な点が異なるハンデを持つスタッフに利便性を提供し、同時に生産効率を向上させている。ここでは効率と思いやりが高いレベルで統一また融合しているのである。

また特筆すべきはスタッフの管理方法だけではなく、物品の落下防止のためキャビネットの上部を三角形にする、またパズル方式でファイルの分類を行うなどのアイデアは、全ての企業においても活用できるものだと思う。

**日 付： 11月25日（水） 2日目**

**大学名： 中央音楽学院**

**氏名： 祝紅**

今日も早くに起床し当日の予定に備えた。そそくさと朝食を済ませ、私たちは嵐山を訪れた。艶やかな紅葉の色が雲の中から見えるような景色はとても美しかった。ただ時間の関係でこの大自然の美しさをじっくり堪能することができず、私たちは直ぐに周恩来総理の詩碑を訪れた。この詩碑は1978年10月に日中平和友好条約締結を記念して建立された。詩碑を見学し記念撮影をした後、私たちはその場を後にした。

次いで私たちは金閣寺を訪れた。ここは外装に金箔が使われているため金閣寺と言い、1397年に建立され、1994年にユネスコの世界遺産に登録されている重要な歴史的建造物である。私はその壮大さに驚嘆させられた。記念写真を撮り、記念品や地元の軽食などを買った後バスに戻り、多少の休憩をしてから次の目的地に向かった。

昼、私たちは本場の日本料理を体験したが、本当にとても手が込んでいて、見ているだけでお腹が一杯になった。中国の食文化とは大きな違いがあるが、日本のこうした洗練された食文化も素晴らしいと思った。

食事を終え私たちはオムロン京都太陽株式会社を訪れた。私はこの会社はとても特別な会社だと思った。と言うのも同社は障がい者を雇用しており、ここでは彼ら自身の社会貢献や生きがいを見つけることができるからである。スタッフの案内で私たちは彼らの作業場などを見学したが、私は身体にハンデのある彼らがひたむきに仕事に取り組んでいる姿に衝撃を受け、彼らのひたむきさを私たちも学ぶべきだと思った。もちろん、身体ハンデが人生に影響を及ぼさないための同社のような思いやりのあり方も中国は学ぶべきである。

この日の夜は美味しい鍋に舌鼓を打ち、楽しく有意義な一日を終えた。

**日付： 11月25日 (水) 2日目**

**大学名： 中央财经大学**

**氏名： 楊敏媛**

今日私たちは古都京都にやってきた。道中は素朴な美しさを持つ街並みを楽しんだ。日本の一般家庭の一戸建て住宅やチョコレートのような外観のマンションからは、いずれも洗練された印象を受けた。京都では遠くを眺めると、ほとんどが二、三階建ての建物で、その多くが唐風建築であった。また古都としての趣を守るため、京都では高層ビルがとても少なかった。こうした点は中国の伝統文化保護や伝承において大きな参考価値があると思う。

午後に訪れたオムロン京都太陽株式会社はとても印象深かった。ここは障がい者を対象に仕事の場を提供している会社である。これまで私自身も社会的弱者を思いやらなければならないことは知っていたが、バスなどで座席を譲る、政府が手当を支給するといったこと以外に、彼らのために何ができるのか分からなかった。そして今日オムロン京都太陽株式会社を見学し、私はずいぶん「授人以魚不如授人以漁(魚を与えれば一日の飢えをしのげるが、魚の釣りがたを教えれば一生の食を満たせる)」の本当の意味を知った。それぞれ左腕と右腕にハンデを抱えるスタッフを一本の生産ラインで組み合わせる、知力ハンデのある運搬スタッフのため通路を色分けする、視力を失った人のため音声式の体温計をデザインする、こうした数多くの細やかさがこの企業の真心を代弁している。理想と実現性の融合、これは私が感じた日本企業の特徴である。

私たちの見学は何らここで働くスタッフの仕事の邪魔にはならず、逆に彼らは、私たちが見学をすることでより多くの人に障がい者が自立できることを知ってもらい、それが将来的により多くの障がい者が職に就く可能性につながることを誇りに思う、という解説を担当したスタッフの言葉を聞いた時、私は彼らの強さに心から感動し、また敬服した。

**日付： 11月26日 (木) 3日目**

**大学名： 北京師範大学**

**氏名： 王蓉**

自分の通う大学内では日本からの留学生と交流する機会があったものの、今回のように踏み込んだ討論をし、それを総括して発表するというのは初めてであった。同志社大学の学生は思考がとても活発で、討論の際に頻りに新しい発見があった。私たちはD組で、選んだテーマは日中両国の文化における共通点と相違点であった。私たちは食、住まい、アルバイトそして恋愛などの面から両国の大学生生活を比較し総括した。

その際私たちに一点不足があったとすれば、それは私たちの組では最終的に訪日団のメンバーが発表を担当できなかったことである。私たちの組には日本の学生の他に一名上海から留学に来ている先輩の女子学生がいた。彼女は外向的で、私たちと日本人学生の交流をサポートしてくれ、とても良い人であった。そして討論が終わり発表者を決める時に、私は当初その日本語の上手さなどから北京外国語大学の陳鑫さんを推薦したのだが、なぜか他の人は先輩の女子学生を推薦したのである。だが今更ながら私はD組のリーダーとして、やはりその時私たち訪日団の学生に発表させるべきだったと思う。この点はミスであった。明日はまた発言する機会があるので、私たちは積極的に訪日団の大学生としての良いイメージを示していきたいと思う。

皆の発表はどれも独創的でとても素晴らしかったが、特にA組は皆から好評を得ていた。彼らは演技をまじえて生き生きと両国の歴史上の文化的習慣の変遷などを紹介していた。私たちも彼らを手本にしたいと思う。

午後は同志社大学の学園祭に参加した。私たちは同志社大学の日本人学生の案内の下、人混みの中をあちこち歩き様々なイベントを体験した。学生手作りの美味しい軽食などもあり、皆とても生き生きしていた。私は、元気と活力に満ちているキャンパスだからこそ、その場にいるだけで自然と楽しさが伝わってくるのだと思った。

**日 付： 11月26日 (木) 3日目**

**大学名： 北京理工大学**

**氏 名： 高健**

三日目、私たちは大阪を離れ再度京都へ向かい、同志社大学を訪れた。幸運だったのは、丁度同大学の140周年記念式典の時期であり、彼らが学園祭と呼んでいる祭典に参加できたことである。日本の大学の学園祭は、私に学校の記念式典に対する新たな概念をもたらしてくれた。同志社大学の学園祭は完全にカーニバルと言えるもので、様々な美食やパフォーマンスなどがあり、とても目新しいものであった。また私たちは同志社大学の日本人学生と交流を行い、両国の大学生の共通点や相違点などを学び、さらに中国から留学に来ている先輩学生からキャンパスを案内してもらうなど、同志社大学についてより多くを知ることができた。

夕刻が近づいた頃私たちは京都駅に到着し、そして新幹線で熱海に向かった。新幹線について私が驚いたのはそのスピードではなく、1964年からこうした高速の列車があったということである。

今日のハイライトは、夜宿泊した温泉旅館での豊富な懐石料理、楽しいパフォーマンス、そして心地良い温泉であった。一つ残念だったのは、恐らく冷たいものを食べたせいかお腹の調子が優れず、食事を食べることができなかったことである。ただパーティーの司会を務めることができたのは、自分としてもとても嬉しかった。これまで色々なイベントの運営をしてきたが、パーティーの司会は初めてであった。それから温泉はとても心地良く、特に美景を眺めながらの温泉は格別であった。

明日から東京へ向かう。買い物三昧の日々が間もなく始まる。Keep going !

**日 付： 11月26日 (木) 3日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 陳鑫**

今日は早くに起床し、バスで同志社大学の訪問に向かった。同志社大学はさすがに関西の有名私立大学「関関同立」の各校だと思わせるものであった。まず午前、私たちは同大学の日本人学生と、両国の大学生生活や文化の共

通点や相違点についてテーマ討論をした。討論を通じて私たちは、アルバイトや食・住、学習そして恋愛などの面においては一定の違いがあることがわかった。その後、他の学生たちの前で手短ながら生き生きと討論の結果を発表した。また経済学部の本木匡教授のお話を通じて、私たちは東アジア文化を守っていくことの重要性を学んだ。

昼食をはさんで、私たちは同志社大学の学園祭に参加した。楽しい音楽や美食があり、また様々なイベントが多くの人を引き付けていた。個人的にはお化け屋敷やメイドカフェなどが興味深かった。

学園祭の後、私は個人的に同志社大学の歴史資料館を見学した。そこで創立者である新島襄のエピソードを知った私は同志社大学への敬意が深まり、大河ドラマ『八重の桜』を見ようと心に決めた。

その日の晩、私たちは熱海に到着し、旅館の懐石料理が私たちを出迎えてくれた。私たちは美味しい料理に舌鼓を打ちながら出し物を披露し、パーティーを楽しんだ。その後皆で温泉に浸かった。これは私にとって初めての温泉体験であった。

明日は東京に向かう、楽しみだ！

**日 付： 11月26日（木） 3日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 劉思陽**

三日目における最大の見どころである同志社大学の見学では、日本の大学生との交流を通じて多くの収穫があった。

午前の交流は主に同志社大学の紹介とグループ別のテーマ討論であった。同志社大学のキャンパスは赤レンガ建築を基調としており、建学理念は「キリスト教主義」、「国際主義」、「自由主義」を主としている。創立者の新島襄はかつて「一つの国を維持するのは決して二・三人の英雄の力ではなく、一国を形作る教育があり、知識があり、品性の高い人々の力によらなければならない。」と述べている。そして今日出会った日本の学生はまさに新島氏の言葉通り、知識が豊富であるだけでなく、思考や表現そして構成力なども素晴らしかった。そしてわずか1時間半のうちに、双方の学生はテーマ討論とその発表をつつがなく終えた。これは双方の学生の総合能力の高さを感じさせるものであった。

討論を終えた後は学園祭の見学であった。これまでは教科書での学習の際に学園祭については多少触れていたが、今日実際にその場にいられたというのはとても楽しい体験であった。日本の大学におけるサークル活動や学園祭というものは日本特有のものだと思う。中国の大学でもある程度のサークル活動があるが、その規模や質などは日本には大きく及ばず、ごく簡単なものである。こうした活動の展開は、学生の総合的資質やコミュニケーション力、また創造力の向上に役立つと思う。

**日 付： 11月26日（木） 3日目**

**大学名： 中央音楽学院**

**氏 名： 孫詩博**

訪日三日目、ここ数日睡眠時間は多くなかったが、皆の情熱は冷めることはなかった。そしてこの日も朝食を済ませた後、同志社大学へと向かった。

同志社大学は京都にある世界的にも有名な大学であり、1875年に日本の著名な思想家の新島襄によって創立され、「最高の知識への追求とその共有」を校訓としている。

同志社大学に着く前は、日本の学生は人当たりがどうなのかわからず、内心多少の不安があった。しかし実際は、彼らはとても親切であった。そして熱のこもった討論が始まった。私たちは経済、文化、歴史、音楽など多くのテーマの中から両国の古代から現代にかけての恋愛の発展をテーマに選び討論をし、その後私たちはそれぞれ両国の古



代と現代のカップルを演じながら討論の結果を発表した。他のグループの発表もとても素晴らしく、会場の皆から大きな拍手があがっていた。昼食を済ませた後、私たちはキャンパスの見学を始めたが、丁度学園祭が行われていた。学園祭では多くのサークルの学生が多忙を極め、学生自ら出店を出し、彼ら自作の作品や食べ物などを販売していた。私たちはこうした場面を初めて目にしたこともあり、大いに楽しむことができた。そして同志社大学での活動を終えた後、私たちは新幹線で熱海に向かった。新幹線は中国の高速鉄道に似ていたが、中国より数十年早く普及している。そして熱海に到着後、私たちは温泉旅館に向かった。

私たちは美味しい懐石料理に舌鼓を打ちながら、訪日団の各校の出し物を楽しみ、そして少し気恥ずかしかったが温泉を堪能した。

**日 付： 11月26日（木） 3日目**

**大学名： 中央財經大学**

**氏 名： 宋佳音**

今日は訪日三日目で、大いに中日交流ができた一日であった。

長時間のバス移動を経て、私たちはついに同志社大学に到着した。実のところ、以前笈川先生のクラスで知り合った吉田翼さんのWeChatの記事で、同志社大学にて私たちの到着を待っていることを知っていた。私は彼がまだ北京大学で交換留学をしていた当時、彼と知り合った。

同志社大学は古色蒼然としていて、建物は西洋風であった。そしてテーマ討論の会場に向かう途中、私は吉田さんを見かけ互いに挨拶を交わした。会場に到着し私たちはAからGまでの7つの組に分けられ、各組毎に中日両国にまつわる様々な話題について討論を行った。

私たちの組の討論テーマは爆買い現象についてであった。同じ組には中国からの留学生もいたので、彼らが通訳をすることで言葉の心配をすることなく、皆は多くの意見を出し合い討論をした。その後私は私たちの組の代表の一人として、同じ組の日本人男子学生と一緒に討論の成果発表を行った。とても楽しかった。

夕刻私たちは新幹線で熱海に向かい、夜温泉旅館に到着した。新幹線は中国の高速鉄道のスピードより速い感じがした。

温泉旅館は和室で、私はこれに『5時から9時まで』のシーンを連想しとても嬉しくなった。夕食は懐石料理を堪能し、その後皆で色々な出し物を披露して楽しんだ。温泉に浸かった際、心から日本の化粧品の使い勝手の良さに感動した。

**日 付： 11月27日（金） 4日目**

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 邵典**

朝18階のレストランで早朝の大海原を眺めながら朝食を堪能した後、2時間以上の道程を経て磯子火力発電所に到着した。

実は磯子火力発電所の見学については出発前から興味を持っていた。それと言うのも、環境保全やエネルギーはとても重要な分野であり、工業のモデル転換と汚染の問題が際立っている中国にとっては特に学ぶべき内容だからである。磯子火力発電所は東京に次ぐ2番目の大都市である横浜にある。同発電所はJ-POWERの最先端の火力発電所で、首都圏への電力供給という重責を担っている。窒素酸化物などの排出削減や環境保全のため、同発電所では設備の刷新を行い、「超々臨界技術」を採用することでエネルギー効率を世界最高水準に引き上げている。私たちは同発電所の先進技術や乾式脱硫脱硝装置などの環境対策設備の紹介を受け、こうした環境への配慮にとっても感銘を受けると同時に、彼らの更なる環境保全のための努力に敬服した。

日本のエネルギー自給率は低いため、発電分野ではエネルギーの多様化を推し進めており、風力や天然ガスそして原子力エネルギーなどがますます重視されている。そしてエネルギー需要の高い中国では、クリーンエネルギーの開発やエネルギー効率の向上などは重視されるべきものである。そのためエネルギー企業には環境への責任意識を持ってほしいと思う。

ここでいくつか印象深かった点を挙げたい。あるスタッフが片膝をついて真剣に花に水をやっていた。そして100mの高さのボイラー建屋屋上から一羽の鳥が煙突の傍を飛んでいるのを見かけた。また見学を終えて戻る際、多くの男性スタッフが芝生の上でスコップを使い雑草除去をしていた。これらを目にした瞬間、心が温くなる思いがした。

午後は法政大学を訪れ、王敏教授の講座を拝聴した。生活、民間習俗、民俗信仰や中国古典教育などの面から中日文化の共通点や相違点を紹介した講座の内容にはとても引き付けられた。そして王敏教授の中国古典文化の発信や文化に対する細かな観察にはとても感動させられた。

**日 付： 11月27日（金） 4日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 潘向茹**

今日もまたスケジュールが充実していて、収穫も多かった。

午前に私たちは「J-POWER磯子火力発電所」を訪れ、同発電所の作業工程や発電の状況などについての見学を行った。ここではその詳細については割愛するが、私の個人的な感想などについて簡単に述べたいと思う。同発電所について私が最も感動したのは、一つにその先進的技術と大気汚染物質の低排出率である。「クリーンコールテクノロジー」を応用し、同発電所では「世界最高の発電効率と世界最低の大気汚染物質排出率」を実現している。さらに積極的に海外での発電プロジェクトに関わり、世界経済の発展と世界の環境保全に大きな貢献をしている。またJ-POWERの発電技術は世界のトップにあるが、そうした中でも資金を投入してより優れた技術の開発を続けている。こうした現状に満足せず成長を続けるという姿勢は、会社の発展のみならず国の発展においても必要不可欠である。感動したもう一つの点は、同発電所の美しい環境であり、とても目の保養になり清々しい気分になった。これらの面については中国も学ぶべきであると思う。

午後は法政大学の王敏教授の講座を拝聴し、とても多くの収穫があった。王教授は漢字文化から中日両国文化の共通点を分析し、私は中日両国にはこれほど多くの文化的共通点があったのかと、その内容にとっても驚いた。それと同時に、中国と外国文化の比較研究において成果を挙げるためには、中国文化を十分に理解することが大前提であるということを再認識した。私たちは王敏教授のように中国文化をしっかり理解し、さらに中日両国文化における共通点や相違点そしてその背後にある原因などを絶えず研究していかなければならないと思った。王敏教授の中日文化研究における数々の成果に敬服すると同時に、私自身も将来自分の専攻する分野において何らかの成果を挙げたいと思う。もちろんそのためには自分の努力が必要であることは理解している。

今回、自身の人生目標がより明確なものになった。これこそ「あなたの話を聞くと、10年の読書に勝る」である。

**日 付： 11月27日（金） 4日目**

**大学名： 中央音楽学院**

**氏 名： 韓天雅**

今日はまず磯子火力発電所を見学した。バスを降りゲートから敷地に入ると、皆はまずその美しい環境に目を奪われた。それから宣伝ビデオを見て、同発電所について一定の理解を得た。磯子火力発電所は、1952年設立のJ-POWERにより建設された東京湾地区で唯一の石炭火力発電所である。またその石炭火力発電効率は世界のトップである。

続いて私たちはスタッフの引率の下発電所内を見学した。敷地内はとても綺麗で緑化率も高く、発電所だと言われなければ、まるで自分が庭園にいるような感じさえる。法規定では緑化率は15%を満たせばいいのだが、ここでは20%以上に達している。J-POWERは横浜市とそれまでの『公害防止協定』に代わり『環境保全協定』を新たに締結し、クリーンコールテクノロジーにより発電を行っている。敷地内に身を置いている私は、こうした環境への配慮を直に感じる事ができた。運転センターではスタッフの真剣な仕事ぶりを見学することができ、窒素酸化物や硫黄酸化物などは規定値以下で排出されていた。またボイラー建屋の屋上では発電所全体を見渡すことができ、それは周辺の街並みと一体化していた。さらに煙突からは汚染物質の排出は見られなかった。これには環境保全事業の重要性が垣間見られた。

磯子火力発電所の見学を終えた私たちは法政大学を訪れ、王敏教授の講座を拝聴した。その内容は9つの面からの中日文化の融合に対する考察というもので、講座を通じて日本の漢字文化が中国の漢字や古典文化を基にしたものであるということがわかった。そしてビュッフェディナーでは学校毎に組分けし、それぞれの専攻分野で王敏教授と交流を図り、沢山の収穫が得られた。今後自分としても、中日文化交流において何らかの役に立っていきたいと思った。

明日からホームステイだと思うと今から興奮と期待で一杯である。おやすみなさい。

**日 付： 11月27日（金） 4日目**

**大学名： 中央财经大学**

**氏 名： 遼黛妮**

豪華な朝食の後、私たちは横浜の磯子火力発電所を訪れた。ここは火力発電とは言うものの、クリーンコールの利用などにより最大限の発電効率向上や汚染物質削減を実現し、一部の副産物については肥料の原料や建築材にするなど再利用に努めている。発電所全体は落ちた石炭のかけら一つ見当たらずとても清潔で、運転センターでは汚染物質濃度などを厳しくモニタリングしており、私のこれまでの火力発電所に対する偏見は完全に覆された。私は山西省の出身である。山西省は石炭で知られているが、大気汚染がひどく、石炭関連の事故が頻発することでも有名である。そして石炭が有効利用されていないことが現在でも問題となっている。石炭資源統合プロジェクトは小規模石炭採掘を淘汰する上では一定の成果があったが、火力発電においては目立った成果が挙がっていない。山西省としては磯子火力発電所のような技術が早急に必要であり、今後山西省とJ-POWERが省エネや排出削減といった面で提携できることを願っている。

午後、私たちは法政大学にて王敏教授の講座を拝聴し、多くの収穫が得られた。王敏教授からは漢字文化が中日両国文化において果たした伝承の役割について紹介があり、講義を通じて私の漢字に対する考え方が広がった。それと同時に王教授の研究手法も私にとっては大きな参考となった。何か面白い現象を見つけた場合は、なぜそうなったのかをよく考え関連資料を調べることで、その積み重ねにより結論を得ることができる。その後王教授から清朝末期に多くの学生が法政大学で学んだ原因やその過程、そしてその後の影響などについての紹介があり、私たちは法政大学が中日関係において果たした役割をさらに理解することができた。王教授は日本において独特のユニークな方法で中国文化を広め、さらに中日両国の繋がりや相違点などを研究することで中日友好交流とその発展に絶えず貢献されていてとても素晴らしいと思った。

**日 付： 11月28日（土） 5日目**

**大学名： 北京師範大学**

**氏 名： 刁愛敏**

今日は待ちに待ったホームステイの日である。北京を出発する前から1泊2日のホームステイがあることを聞いてい

て、今日この日まで私は、ホストファミリーはどんな方たちなのだろうと考えていた。

午前9時30分、他のメンバーがホストファミリーと出発していく様子を私が多少緊張しながら眺めていたところ、あるご夫婦が入室し私を伴ったのである。そう、彼らこそ私のホストファミリーの深澤さん夫妻であった。深澤さんとは事前にメールをしていて、まず私たちは横浜ランドマークタワーへ向かった。そして273mの展望フロアから周囲の建物や河川など美しい景観を堪能した。それから深澤さんとともに閑静な青葉台に到着した。午後の時間はとても楽しく、時間があっという間に過ぎてしまった。深澤さんは仕事の関係で頻繁に中国を訪れていて、現在でも中国語を勉強中とのことで、私たちも互いに教えあった。

夕食は深澤さんが自ら餃子をつくることになった。自分たちで具材を買い、餃子をつくる。私たち三人は厨房で楽しく作業をした。これには私は異国の地で自宅の温かみを感じた。

ホームステイ初日はあっという間だったが、深澤さんの家で私は日本人の細やかさや優しさ、そして綺麗好きといった点を体感した。明日も楽しみだ。

**日 付： 11月28日（土） 5日目**

**大学名： 北京理工大学**

**氏 名： 李緒嘉**

ホームステイ初日の今日はとても楽しかった。私は今日ホストファミリーから沢山の驚きと喜びをもらった。

今日の朝私たちは日中経済協会を訪れ、それぞれのホストファミリーが来るのを待っていた。そわそわしながら待つこと暫くして、30歳くらいの私のホストファミリーのご夫婦が迎えに来てくれた。奥さんは上海に2年ほどいたことがあり中国語ができた。私の性格は外向的なので、すぐに彼らとは打ち解けることができた。彼らと話をしているにつか印象深かった点がある。まず日本人の仕事の多忙さである。ご主人は一日約5-6時間しか休める時間がなく、それ以外の時間は仕事や残業或いは通勤時間に割かれている。これには私は日本企業に対して多少の怖さを感じてしまった。次に彼らの家庭観である。自分の子供については、親は子供の彼らに十分な選択の自由を与えていて、彼らの結婚や出産、就職などについて親が強制することはない。こうした家庭的なストレスの少なさがある意味日本の出生率の低さにつながっているのかもしれないが、別の意味では若い世代の生活がより楽しく幸せであるとも言える。日中私たちは浅草寺やスカイツリーを見学し、日本の一般市民の日常的な「ワーキングランチ」を食べたが、とても美味しかった。私が食べた冷やし蕎麦の味は今でも忘れられない。

夕刻になりホストファミリーの御宅に到着したが、まるでドラえもんやクレヨンしんちゃんといったアニメに出てきそうな印象を受けた。私はついにこうした光景を目にすることができた。夕食は自家製の海苔巻きで、とても美味しく、これこそ日本という感じがした。

**日 付： 11月28日（土） 5日目**

**大学名： 中央音楽学院**

**氏 名： 劉書辰**

今日は今回の訪日活動におけるクライマックスとも言える皆が期待していたホームステイの日である。

朝早く、皆は子供の頃のように荷物をまとめ、待合室で「父母」の迎えを待っていた。

私は比較的早い段階でホストファミリーと対面することができた。互いに挨拶を交わした後、私たちは東京で最も大きな魚市場へと向かった。そこでは前日に海で捕れた沢山の魚が並べられていた。これらの魚を見ながら私は、日本の国土がさほど大きくはないため、輸送なども自然と速いのだろうと思った。

暫しの買い物を終えた後、私たちはホストファミリーの御宅に到着し夕食となった。その際、私が気になっていた点について語り合った。

私は、日本の子供が寒い冬に脚を露出させていても親がそれを諷めないことがなぜなのか不思議であった。これに対してホストファミリーからは、昔から日本では健康な子供は寒さへの抵抗力があると考えられていて、その抵抗力を高め子供がさらに健康になるためにこうした習慣は現在まで続いているとのお話があった。個人的には理解しづらかったが、それでも理に叶った回答が得られたと思っている。

また私のホストファザーは、これまでアメリカやシンガポール、そして中国などで仕事をしてきた方で、そのため娘さんや息子さんも様々な経験をしてきたことを知った。また中国在住時は北京で生活しており、しかも私が通う大学でピアノを学んでいたそうである。

こうした思いもよらない縁で今回出会えたことに、私は世界とは大きいようで小さいものなのだと感じさせられた。今回は短い時間の触れ合いだが、まだ先は長いのである。特別な縁を持つ私たちが将来北京で再会できることを願っている。

**日 付： 11月28日（土）5日目**

**大学名： 中央财经大学**

**氏 名： 高鵬崢**

人と人との縁は本当に大切にすべきだと思う。

直美ちゃんとしげちゃんからは本当に多くの感動をもらった。

出発前のメール連絡の際、私はしげちゃんとなおちゃんに東京タワーや皇居、或いは藤子・F・不二雄ミュージアムなどどこでも良いから行ってみたいと伝えていた。結果直美ちゃんはそれらすべてに連れて行ってくれた。道中では荷物を持つのを手伝ってくれて、さらに様々なスポットについて詳しく説明してくれるなど、初めの頃の緊張はもうなくなっていた。東京タワーでは丁度ワンピースの展示会があり、とても楽しめた。そして藤子・F・不二雄ミュージアムでは、内部の撮影はできなかったものの、ドラえもん原稿を直に目にすることができた。ドラえもん好きの人にとっては、これ以上嬉しいことはないと思う。

三カ所の見学を終えて、私たちはなおちゃんの御宅へと向かった。そこでは格好良いしげちゃんが早々にご飯の準備を済ませ私たちの帰宅を待っていた。そこで感動したのは、私が辛いもの好きだということを知り、しげちゃんが麻婆豆腐を作ってくれたことで、しかも私の父親が作る味と同じだったことである。

夕食後は、しげちゃんとなおちゃんと三人でおしゃべりをした。その際来年私が福岡大学に行くと言う話になり、しげちゃんは学校のHPから様々な情報を調べ、学生寮などの資料をプリントアウトし私に詳しく教えてくれた。おかげで私は学校の状況などについてより理解を深めることができた。これにはとても感動した。

これほど優しく親切なご夫婦と知り合うことができたのは、まさに前世の福が訪れたものだと思う。

**日 付： 11月29日（日）6日目**

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 劉益瀚**

朝8時に起き、ホストファザーと一緒に自転車で近くの羽田図書館へ行った。

羽田図書館は地域の図書館で、中国で言うところの社区(コミュニティ)における図書館に当たる。ここは大きくはないが、とても静かであった。しかし中国の図書館はいつも騒がしく、大きな笑い声や電話の相手がよく聞こえるような大声で話す声が聞こえている。この点については、両国には大きな違いがある。

違いがあるのは、地下鉄やエスカレーターもそうである。日本の地下鉄やエスカレーターは混み合っていないわけではないが、驚くほど整然としている。エスカレーターでは皆が一行に並び左側に立ち、右側は道を急ぐ人の為に空けている。地下鉄のドアの前では、乗客はドアの両脇にならび、真ん中を下車する人のために空けている。こうするこ

とで乗車や下車そして上り下りの効率が良くなるのである。それに引き替え中国では、皆が元気一杯に押し合いをし、新興国の活気に満ちている。

ホームステイに話を戻す。今日の午後ホストファミリーとお別れをした際に、彼らから沢山のプレゼントをいただいた。またホームステイ期間中は私に様々な経験をさせてくれるなど、彼らには心から感謝している。

**日付：11月29日（日）6日目**

**大学名：北京大学**

**氏名：曾瑩**

ホストファミリーとの最終日は、日本最大級の観覧車や水族館で遊び、ジャンクフードを食べ、ディズニーランドで記念品を買ったりするなど、私は旅行客ではなく家族としての過ごし方を体験した。また私が中国の朝食では米を食べる習慣がないと伝えた際、ホストファミリーはわざわざベトナムビーフンの作り方を調べ、私の為に朝食として作ってくれた。とにかく嬉しかった。

実のところ、日本に来てからは最高級ホテルでの生活や食事が続いていたため、ホームステイ当初は多少の戸惑いがあったが、それでもすぐに溶け込むことができた。私は日本の一般家庭で、ゲストとしてではなく一人の一般人として日本での生活を体験し、日本の政府、社会、コミュニティ、商業、教育などがどのように日本という国を形成する最小単位である一般家庭に影響を与えているのかを感じることができた。これはとても貴重な経験だと思う。この経験はファンタジーではなく、私に実際の生活というものを教えてくれた。日本の福利厚生はとても素晴らしく、ホストファミリーの御宅の傍には大きな公園があった。そこには観覧車、発着場や水族館などがありバーベキューも楽しむことができる。ホストファミリーが言うには、週末にはよくこの公園を訪れ、散歩やバーベキュー、桜の季節には花見をしたりするとのことであった。こうした生活は中国ではほとんど目にするものがないものであるが、『クレヨンしんちゃん』や『ドラえもん』、またエレクトロニックアーツ社の『シムシティ』では見たことがある。私はこうした生活はとてもいいと思う。

先進国において、一般市民は幸せだと私は思う。彼らには完全な社会保障制度がある。例えばホストファミリーの御宅のある地域にはチャイルドケアセンターがあり、無料開放されている。そして素晴らしい居住環境と社会秩序がある。この数日間で私も自然と「すみません」と「ありがとう」を覚えてしまった。またこの6日間空はずっと澄み切っていて、空気もとても清々しく、海は青く、河川の水も澄んでいる。ここは多忙だが繁栄している街であり、本当の意味で「先進」の二文字にふさわしいと思う。

私の祖国もいつの日か「Developing」の「ing」が「-ed」に変わり、活力と積極性を保つと同時に、遅れた・効率の悪い・朽ちた・進歩を遮るといった要素を拭い去り、本当の意味での大国になることを願っている。

**日付：11月29日（日）6日目**

**大学名：北京師範大学**

**氏名：臧曉慧**

今日はホームステイの2日目である。ホストファミリーの御宅では猫を3匹飼っていたが、元々猫が苦手な私は最初とても怖かった。しかし3匹ともとても大人しく、カーペットの上で毛糸玉のように丸まっている様子はとても可愛らしかった。そして私は実際に手で触れることができ、従来からの恐怖心を克服できた。これにはホストマザーの言うとおり、何をするにおいても初めから怖がり「私には無理」と言って諦めるのではなく、結果がだめでも、まずはチャレンジしてみることが大切なのだと改めて感じた。

今日はホストファミリーのお母さんやお兄さんと東京ディズニーランドを訪れた。そこでは沢山の幼少時代の思い出や童話の世界、そして美しい建物や楽しい雰囲気に触れることができた。さらに印象に残ったのは、各アトラクションでの行列の整然とした様子やスタッフの礼儀正しさであった。楽しい音楽や雰囲気の中で、園内が人ばかりであろうと、

皆がいららすることなく並んで自分の順番を待っていた。そして一日中陽射しの下で立ち仕事をしていても、スタッフは明るく元気にあいさつをし、笑顔を絶やすことなく注意事項などを説明していた。

今日のディズニーランドの旅は、乙女心や童心を取り戻す以上に学習の旅となった。夕方になり約1日半のホームステイが終わり、名残惜しくもホストファミリーとお別れをした。これから気持ちを落ち着かせ、明日からの活動に備えたいと思う。

**日 付： 11月29日 (日) 6日目**

**大学名： 北京理工大学**

**氏 名： 杜奕聡**

今日の朝、ホストマザーが私に浴衣を着せてくれて、さらに記念写真を撮ってくれた。先日の旅館で着たものに比べ、今日着たものはより本格的で、着付けもより複雑であった。幸いホストマザーは京都での学生時代に着付けを学んでいたそうだが、今では若い人の多くは和服の着付けを知らない。伝統要素が伝承していく過程で次第に薄れ変化していくという点は両国が抱えている問題である。朝私はホストファミリー三人の普段通りの週末の生活を体験した。まずできたてのパンを売っているパン屋にやってきた。ここはパンの種類も豊富で、しかも無料でコーヒーを楽しめることもあり、多くの人がここで朝食をとっていたが、店内はとてもしっかりとしていて、しかも皆がごみを持ち帰りテーブルは綺麗に片づけられていた。一般家庭の日常生活を体験することは私の願いであった。私はこれまでアニメなどの影響を受け、一般の日本人の生活や仕事などはとても大変で、収入こそ多いが物価も高く、生活の質の面では良いとは言えないものだと思っていた。今回は賑やかなそして発展している日本を体験したが、それでも日本の特に優れているところしか目にしてこなかったような気がする。そしてこのホームステイにおいて、私は一般家庭の日常生活を通じて日本人の家庭や仕事、教育レベルや週末の生活など直接的な認識が得られた。住民用の施設や商店、公園ひいては百元ショップなどで自分自身様々な発見があった。物価は高いものの、高すぎるわけではなく、収入レベルに比べれば一般市民の生活の質はとても高いと思った。千葉のマンションの賃貸料金は人民元換算でひと月6000元もするが、日本の若い世代の中では賃貸そのものは広く受け入れられており、高い不動産価格が住宅ローンに苦しむことには直結しない。

日本人は年老いても自分自身の生活を追求するため、さほど孫の面倒を見たりはしない。複数の子供による家庭と父母からの直接教育は、多くの中国の子供が経験することの出来ないものであり、これは子供同士の助け合いや他人への思いやり、そして強い意志を育むうえでも有利な家族形態だと思う。

**日 付： 11月29日 (日) 6日目**

**大学名： 北京外国語大学**

**氏 名： 賈子赫**

前の晩は夜更かしをしたため、この日は9時半によく目が覚めた。朝食は典型的な日本の朝食でとても美味しかった。そして食後少しの休憩をはさんでから外出した。

浅草寺に到着した。そこはとても人が多く、沢山の中国人も見かけた。彼らのイントネーションから、中国の南方出身の人が多そうに思えた。それ以外にも様々な国からの観光客を見かけた。昼食は醤油ラーメンで、並んだ甲斐があると思えるほど美味しかった。

午後は皇居へ向かった。その際幸いにも皇后陛下が車で外出される様子を目にすることができた。

そしてお別れの時間となった。とても辛かったが、明晩の懇親会にも出席されるとのことだったので安心した。

その日の夜はお台場に行き、ショッピングなどを楽しんだ。

昨日は夜更かしをしたため、今日はとても眠い。早く寝たいと思う。

**日 付：11月29日（日）6日目**

**大学名：中央音楽学院**

**氏 名：朱瞳瞳**

今日の予定は3つ。美術館と浅草寺に行き、そしてスーツケースを買うこと(買い物をし過ぎて荷物が収まらなくなったから)である。

今回は私にとって4回目のホームステイで、さらには4カ国目の体験になる。今回はやはり同じアジア人ということで、とてもリラックスすることができた。ホストファミリーの中では、お母さんだけが中国語を話せるため、自然とお姉さんやお兄さんそしてお父さんとの交流は少なくなったが、それでも私は彼らの優しさや友好を感じてとても嬉しかった。

これまで多くの国で少なからず滞在してきたが、やはり日本はとても洗練されていると感じた。またこれには日本人の信用の高さの理由がわかった思いがした。

今日はモネ展を鑑賞した。これまで数少ない中国でのモネ展を、私は幼いころに見たことがあるが、今回日本で鑑賞できて嬉しかった。また展示内容はとても衝撃的で、お母さんやお姉さんもとても満足していた。

残念なことに時間があっという間に過ぎたため、夕方ホストファミリーとお別れをし、訪日団に合流した。本当に名残惜しかった。人と人にとって言葉が通じないことは問題ではなく、心さえ通じ合っていれば、どこでも優しさを感じることができるのである。

**日 付：11月29日（日）6日目**

**大学名：中央财经大学**

**氏 名：車佳寧**

一言で言い表せない今日6日目、横田さんの息子さんは、塾の前に彼の好きな公園で私と散歩をするためだけにわざわざ早起きしてくれた。これには嬉しく思うと同時にすこし申し訳なかった。また私は多くの買い物を頼まれていたため荷物はとても重く、横田さんは息子さんに荷物を持たせていた。彼はとても紳士的だった。

次いで横浜での「暴走」の一日が始まった。まず横田さんは私を連れて息子さんを塾に送り届けた後、造船所に向かった。ここはかつて繁栄を極めた海を埋め立てて造られた造船所で、現在では広場となっている。海風に吹かれて、真っ白な鴉を眺めながら、私の未来について横田さんと意見を交わした。大学生は色々な経験をして視野を広げるべきだと横田さんは励ましてくれた。

今回横田さんのおかげで、私は天皇・皇后両陛下を目にすることができた。両陛下はニュースなどで見かけるのと同じように優しい雰囲気、周囲の人々も道路脇から両陛下の健康を願う言葉をかけ、両陛下も笑顔で手を振りながらそれに応えていた。私はこうした光景から、民衆の両陛下に対する思いやりや好意を感じることができた。

日本の街中を歩いていると、時折街頭でパフォーマンスをしている人に出くわす。私たちは彼らのユニークなパフォーマンスを笑い過ぎて涙が出るほど楽しんだ。これは忘れられない思い出となった。

残念ながら時間が短く、横田さんとお別れをする時間となった。今日は一日歩き通しだったので、私を送り届ける途中、横田さんは地下鉄で寝入ってしまった。私は車窓から西日を見つめながら、心が感謝で一杯となった。

11.29 横浜

**日 付：11月30日（月）7日目**

**大学名：北京大学**

**氏 名：邢仕傑**

今日は住友商事と三井住友銀行を訪れ、多くの収穫が得られた。

午前私たちは三井住友銀行を訪れ、グローバル・アドバイザー部の部長のお話の中で同グループは400年以上



の歴史があり、現在三井住友銀行は世界に70以上の拠点を持ち、業務範囲は投資信託・物流・信用評価そして資金調達などに及んでいることを知った。

その後訪れた住友商事での最大の収穫は企業の価値への追求ということであった。彼らは自社利益のみを追求するのではなく、国や社会への約束事や使命も重んじていた。こうした点も中国企業が学びそして実践していくべきものだと思う。

**日 付： 11月30日 (月) 7日目**

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 郭家棟**

今日は私たちの訪日活動の終わりから2日目、多くの予定が組まれていた。個人的に印象深かったのは中国大使館への訪問であった。中国大使館は閑静な庭園の中にあり、国章を見かけた瞬間、言葉にできない感激がこみ上げた。

私は大使館で中国と日本の未来関係への考察と展望をテーマに発表をした。大使夫人は中日関係の歴史と動向を細かに分析されていて、私としても多くの収穫が得られた。特に大使夫人の日本の歴史についての分析では、広く資料を引用されていて、私はとても敬服させられた。

中国と日本の関係については、私が幼いころから興味を持っていた話題である。私は今回直に日本を訪れることができ、見識を深めることができた。今後もこうした活動において両国の友情が深まることを願っている。

**日 付： 11月30日 (月) 7日目**

**大学名： 北京師範大学**

**氏 名： 王蓉**

「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」

なんと立派で気迫のある言葉であろう！これには孫中山と梅屋庄吉との偽りのない友情とその友情の深さを感じさせられた。また私はこの時、「弱水三千、只取一瓢飲（『紅樓夢』中の一文。この世に美女は沢山いるが、愛するのはあなた一人だけ、の意）」、「山无棱天地合、乃敢与君絶（漢楽府の民謡『上邪』の一節、山がなくなり天と地が合わさらない限りあなたとは離れることはない、の意）」といった誓いの言葉を思わず連想した。

今日は日比谷の松本楼を訪れた。辛亥革命時期、孫中山は日本での亡命時に梅屋庄吉の邸宅に一時的に身を寄せていた。梅屋庄吉はその当時頻りに宴を催し、孫中山を日本の各界の人物へ引き合わせ、さらに物質的や精神的にも自分の盟友そして義兄弟である孫中山のために援助を行った。松本楼は現在でも開かれており、階下には宋慶齡がかつて使っていたピアノが陳列され、当時へ想いを馳せることができる。

この他今日は三井住友銀行と中国駐日大使館を訪れた。

大使は不在で、大使夫人だけだったのは少し残念であった。大使館では各学校の代表者が様々な角度から今回の活動への感想を述べた。例えば北京大学は中日関係、北京師範大学の私は現代の大学生の歴史的使命と責任、中央音楽学院は日本古典音楽といった異なる観点から感想を述べた。立脚点と角度の違いは私に多くの啓発をもたらし、自身の思考能力を高めることができた。

その後住友商事株式会社を訪れ、そこでは懇親会も開かれた。懇親会の席上、私はホームステイや観光そして全体的な印象などについて環境・CSR部部長の角田裕一さんと交流し、その際私はすべて日本語で答えた。角田さんは私の日本語会話能力に驚き、師範大学のその他の学生も呼んで楽しく交流し、最後に記念撮影をした。私はこの時、自身の日本語のレベルが大きく向上したことを感じ、とても嬉しかった。

日 付：11月30日（月）7日目

大学名：北京理工大学

氏 名：平安

今日は最終日の1日前である。

朝の起床時はおそらく昨晚あまり休めなかったせいか、とても疲れを感じていた。それでも幸い今日の予定には影響はなかった。

午前には三井住友銀行を見学し、管理担当者2名による三井住友銀行本店と中国関連業務の紹介に耳を傾けた。同銀行は非常に実力のある銀行で、多くの国に支店を開設し、中央アジア地域においては特に強い影響力を有している。また紹介ビデオを通じて、同銀行の歴史や優位性などについてより深く理解することができた。

昼は、松本楼に向かい昼食をとった。非常に立派な建物とそこでの食事には目がくらむようであった。そこではさらに孫中山と梅屋庄吉に関する紹介ビデオを見て、彼らの深い友情には多くを考えさせられた。「高山流水（自分を理解してくれる真の友人の例え）」という言葉があるが、私はこれこそ二人の友情を最もよく表す言葉だと思う。

午後、私たちは中国駐日大使館を訪れ、大使夫人や各スタッフと交流を図った。その際各大学の代表者からそれぞれ今回の活動に対する感想の発表があり、その中から自分自身も多くを学んだ。そして大使夫人からは中日関係などについてのスピーチがあり、私たちは日常知り得ない多くの状況について知ることができた。

最後に私たちは住友商事株式会社を訪れた。そこでは出口部長から歓迎のあいさつをいただき、さらに同社の社会的責任感や企業文化などを知ることができた。

その後私たちは同社での懇親会に参加し、同社スタッフとの交流を通じてより多くの状況について知ることができた。

明日は最終日である。忘れ難い一日になることを願っている。

日 付：11月30日（月）7日目

大学名：中央音楽学院

氏 名：孫詩博

帰国の日が近づくにつれ、帰国への嬉しさも高まってくる。今日は7日目で、明日には帰国となる。

今日はまず三井住友銀行を見学し、現代的な世界レベルの銀行の様子を垣間見ることができた。ここでは同銀行の管理担当者より同銀行の歴史・未来への展望そして目標などについての紹介があった。

昼は、日比谷公園内の松本楼で昼食をとった。ここはかつて梅屋庄吉が孫中山と宋慶齡を招いた場所で、孫中山がここで日本の各界の人物と親睦を深めたことは、将来の革命事業に非常に大きな影響をもたらした。「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」、国の枠を越えたこの友情は未永く記録されている。

午後私たちは中国駐日大使館を訪れた。私たちはここで中国の力、国際社会における影響力を垣間見ることができた。ここでは各学校の代表者が今回の活動の感想をそれぞれ述べた。私の発表テーマのキーワードは思い入れと熱愛であった。これは私が日本での体験を通じて最も印象深い言葉であった。

夕方からは住友商事を見学した。同社での懇親会の席上、私はホストファザーと再会することができ、とても嬉しかった。そして皆はその場を心から楽しんでいた。

そして、帰国へのカウントダウンが始まった。

日 付：12月1日（火）8日目

大学名：北京師範大学

**氏名：王言**

今日は日本での最終日で、本来は早起きの必要はなかったが、私はなぜか早い時間に目が覚めてしまった。そして荷造りをしたのだが、心の中は帰国への嬉しさと日本を離れる寂しさが入り混じった、何とも言えない気持ちであった。そして9時30分から、ホテルニューオータニのエコ施設の見学が始まった。この見学で印象深かったのは、ごみの分類回収である。ホテルではごみの分類がとても厳しく、ごみの種類も様々であった。ここでは魚や肉そして野菜などの生ごみも作物の肥料や動物の飼料に変えることで、再利用のサイクルを構築していた。

午後は歓送会で、私のホストファミリーも駆けつけてくれたが、その中でも2人のお子さんはその日ちょっとしたアイドルとなり、皆はこぞって彼らと記念写真を撮っていた。「お母さん」は今日もとても綺麗で、和服に身を包んでいた。また、「お父さん」はスーツに身を包みとても格好良かった。そして彼らが私へのプレゼントを用意してくれ、「また日本へ来てね」と何度も声をかけてくれたことにはとても感動させられた。

最後に私たちは感謝の気持ちを込めて歌を披露し、お別れをした。この8日間お世話になった全ての人、中国日本友好協会と中国日本商会、横山さんと中島さん、今回の活動のため尽力いただいた日本の皆さんに対しての沢山の言葉は、今この時ばかりは「感謝」の二文字しかない。有難うございました。

さようなら、日本！

**日付：12月1日（火）8日目**

**大学名：北京理工大学**

**氏名：趙雨涵**

今日は日本での最終日である。朝7時半に起きて着替えを済ませ、外の景色を眺めた。天気は快晴、街の様子は相変わらず忙しそう、ホテル内の庭園はいつものように静まり返っていて、それら全ては私たちが来た時と変わりはない。「輕輕地我走了，正如我輕輕地來，我揮一揮衣袖，不帶走一片雲彩（詩人徐志摩の詩の一節。来た時と去る時で変化がない、の意）」、時間が間もなくお別れという瞬間で静止すると、そこで変わるのとは世界ではなく、自分自身の内面である。この見慣れた建物やこの晴れた空を今度はいつ見ることができるのだろうか。本当に名残惜しい。

私たちが今回の忘れ難い旅をより記憶に留められるように、ということであろうか、最後に私たちが宿泊したホテルニューオータニの見学をした。このホテルはその斬新な視点により私の思考の幅を広げてくれ、私はホテルの発展モデルについて改めて考えさせられた。

ホテルニューオータニは1960年代に建設され、今日まで50年余りの歴史を有しているが、外観や内装などからは、時間の経過により本来の華麗さや豪華さが失われた様子はなかった。ただ勿論、外観はホテルニューオータニとその他のホテルを区別する要素ではなく、その違いは同ホテルが有するエコ施設にある。同ホテルには二つの客室棟があり、年間の電力消費は約1億円規模だが、同ホテルの地下三階に3台の発電施設があることは想像できますか？なんとここではホテルが自家発電をしているのである。発電量そのものは補助的なものではあるが、独自の発電施設があること自体が素晴らしいことである。その後の見学により、微生物の作用を利用し中水をつくる污水处理設備やごみ処理施設など様々な設備を目の当たりにした。特筆すべきは、同ホテルが生ごみから有機肥料をつくり、作物の育成や家畜の飼育に役立っていることである。この他にも様々な再利用が行われていたが、ここでは省略する。

ホテルニューオータニを見学し終わった私の第一印象は、ここはすでにホテルの概念を超えている、というものであった。というのも、私の印象の中ではこうした設備のあるホテルはなかったからである。ホテルの役割やあり方は、いかにゲストにより良いサービスを提供するかという点にあるべきで、その他のホテルはその点を確かに満たしている。そしてホテルニューオータニもその点を満たしているが、ここはその先に行く快適さの裏にある環境に対する優しさも満たしている。これは新たな発展モデルである。単に環境保全意識というだけでなく、私はこうした背景にはブランド意識と競争意識があるのだと思う。一ホテルとして、いかに自身に競争力を持たせるか、効率的で優れたサービス以外には

何があるのか、私は別の重要要素として運営コストの低下があると思う。だが電気や水そして食物は買わなければならず、優れたサービスを提供するためのコストは安くはない。それではいかにコストを下げるのか、私は自分たちでやれることは全てやり、中間コストを下げるのだと思う。これこそ、ホテルニューオータニが自身で発電や浄水などの施設を設置している理由になっているのかもしれない。廃棄物の再利用はコストの大きな節約につながり、再利用で生み出した有機肥料などはさらなる利益につながる。設備投資にお金がかかるという人もいるかもしれないが、同ホテルのスタッフの紹介によると、有機肥料を例にとると、4年間で投資コストが回収可能とのことである。これこそ先見性というものである。しかも環境保全は重要な課題であり、人々にも受け入れられやすい。低コストと優れた品質を兼ね備え、会社は自然とより大きな影響力を獲得することができる。これも一つのPR手段である。

私は、こうしたモデルは一挙両得のものであり、私たちも学ぶべきものだと思う。

**日 付：12月1日（火）8日目**

**大学名：北京外国語大学**

**氏 名：劉思陽**

今日は訪日の最終日である。午前はホテルニューオータニの污水处理やごみの回収分類そして発電などのエコ施設を見学した。ホテルニューオータニに泊まった3日間、その豪華な施設や素晴らしいサービスだけに目が行っていたが、ホテルの地下にこれほど先進的な污水处理や発電の設備があるとは思いつかなかった。こうした設備は恐らく中国のホテルにはないものだと思う。

昼の歓送会には一部のホストファミリーも参加した。席上、学生代表などから今回の8日間の訪日活動についての感想の発表や感謝の言葉などがあり、学生全員で「小手拉大手（「風になる」の中国語カバー曲）」を歌い歓送会は円満に終了した。

8日間の日程を振り返ると、食や住の面ではどれも一流で、目にしたものは日本でも最良の一面であった。ほとんどの場所はホテルの高層階の部屋や企業の最上階で、そこから日本の景色を眺めていた。東京の夜景はさびやかではあったが、人の温かみというものは少ないような印象を受けた。ホテルの高層階で食事をしている時、自分の目にしている整然とした日本は本当に日本の全てなのだろうか、私は常に考えていた。もし機会があれば、私は朝の満員電車や街中の一般的な食堂など一般市民の目線で日本を体験し、日本の別の面を理解したいと思っている。

いずれにしても、今回の旅はとても意義深かった。今回の活動で私は自分の中で日本の輪郭を描くことができた。そして具体的な内容については、これから先私自身じっくりと埋めていく必要があると思う。

**日 付：12月1日（火）8日目**

**大学名：北京外国語大学**

**氏 名：崔正佳**

8日間の日程も最終日となった。時間が経つのは早いもので、仲良くなったと思ったらすぐにお別れである。中国のPM2.5が充満する天気を見ると、帰りたくなかった(笑)。

私たちは今回の日程のほとんどでホテルニューオータニを利用したが、今日ついにこのホテルの「バックストーリー」を目にすることができた。ホテルニューオータニの規模はとて大きいので、水や電気そしてガスなどの需要も大きい。そこでコスト低減や浪費の減少のため、同ホテルでは自身の発電設備を有し約3分の1の電力をまかない、污水处理により中水を作り、トイレの洗浄や花への水やりに利用し、生ごみから有機肥料を作り農家へ提供している。こうした再利用システムにより物質的浪費をおさえている。

昼の歓送会にはホストファミリーが多数駆けつけてくれた。正装した私の「お父さん」を見かけて私はとても嬉しかった。「お父さん」はこれまでたくさんの人を招いてきたかもしれないが、私にとってはたった一人の日本のお父さんとお

母さんなのである。2日間という時間は短い、それでも同じ時を過ごし互いに友情はあるのである。私たちが披露した歌についても、事前に何度も練習してはいたが、実際に歌う際にはとても泣きそうになった。温泉・古跡・夜景など寒さの厳しい北京から日本の中へと、歌詞の多くが今回の私たちの体験と重なり、この数日の様々な場面が次々に思い出された。当初の見知らぬ関係から今では皆の仲がとても良いこの訪日団の解散は、とても名残惜しい。

皆さんとお別れをする際はやはり「ガラス拭き」であった。私たちを乗せた車が何度か角を曲がっても皆は手を振り続けていた。訪日団の皆、そして今回の訪問のために様々な準備してくれた全ての人を名残惜しく思う。

20歳の時期にこうした機会が得られたことは本当に貴重であり、帰国してからも今回学んだことを活かし、自分の生活に役立てたいと思う。

**日 付：12月1日（火）8日目**

**大学名：中央财经大学**

**氏 名：粟鳴飛**

今日は最終日で、他の学校のメンバーやホストファミリー、そして日本とお別れとなり、確かに名残惜しいものがある。それでも私は再会できる機会はあると思っている。

主に述べたいのは2つ。まずは「月有陰晴円缺，人有悲歡離合（蘇東坡の詩の一部、月には欠ける日があれば、満月の時もある。人には楽しい出会いがあれば、悲しい別れもある、の意）」ただし「海内存知己，天涯若比隣（王勃の詩の一部、心の知れた友がいれば世界のどこにいても近しく感じる、の意）」ということである。今日は訪日活動の最終日だが、私たちが堂々と生きていくことでいずれ再会できると私は信じている。旧友を忘れず、新たな友情を育んでいくことが大切である。

もう一つは感謝の気持ちである。今回私たちに有意義で思い出深い8日間を過ごさせてくれた運命に感謝するとともに、中国日本友好協会や中国日本商会、そして各先生方や今回の活動に尽力いただいた全ての方たちに感謝をしている。初来日だった私にとっては、毎日が思い出深く、京都の静かな佇まいや、大阪そして東京の発展ぶり、ホームステイ先での日常生活などすべてが昨日のことにように思い出される。私は今回の活動に参加できてとても幸運だった。だからこそ私は今回の活動中の毎日において、感謝の気持ちを表すべく振舞ってきたつもりである。帰国してからも、私は自分が身を以って体験した日本の清潔さ、日本人の時間概念と環境保全意識、親切さや秩序意識といったものを身近な先生や友人へ伝えたいと思う。これらは実際中国人が学ぶべきものである。そして日本の友人やホストファミリーとも連絡を取り続けたいと思う。

私は、自分が中日の友好交流のために何らかの役に立てることを願っている。それと同時に中日の友好が末永く続くことも願っている。